ポケットモンスター　トワイライト

absolute

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　トワイライト

【Ｎコード】
Ｎ６６９９Ｚ

【作者名】
ａｂｓｏｌｕｔｅ

【あらすじ】
イッシュ地方を舞台とした、ポケモンの二次創作で、主人公は、ヒウンシティ出身の少女『アヤ』です。
具体的なあらすじは、２～３話　投稿してから載せたいと思います。

第1話：いつもと変わらない時間（前書き）

こんにちは、ａｂｓｏｌｕｔｅと申します。

慣れない一人称で、しかも主人公が少女なので、少し読みにくいかもしれません。

それと、もう一つ小説を書いているので（ちなみに、ポケモンの二次創作です）、更新が遅いかもしれないですが、楽しんで頂けたら幸いです。

第1話：いつもと変わらない時間

ポケットモンスター、縮めてポケモン。

この世界で人間と共に暮らしている、不思議な生き物。

ポケモン達の種類は、今現在　確認されているものだけでも、目が回るほどの数がある。

そして世界には、まだ未発見のポケモンも沢山いるらしいから、その数は日に日に増えていく。

ポケモンの数だけ出会いがあり、ポケモンの数だけ物語がある。

そんな無限の可能性を秘めた世界に、この街はあった。

この国を幾つかの地方に分けた時、この辺は『イッシュ地方』と呼ばれている。

あまり大きな地方じゃ無いけど、学者の間の中ではとても興味深い伝説や、発達した機械技術などでその名は広く知られているみたい。　そして、今あたし達が住んでいるこの街、『ヒウンシティ』は、イッシュ地方の中でも飛び抜けて大きな街、いわゆる大都市だった。

天まで届くんじゃないか、とまで思ってしまう程の大きなビルが並ぶ摩天楼。昼夜問わず人ごみで溢れている大通り。
たまに嫌になっちゃう時もあるけど、あたしはこの街が好きだった。

「う……ん……」

そんなヒウンシティの朝。あたしは制服姿で、重たい瞼をゴシゴシ擦りながら通学路を歩いていた。
ピュウと音を立てて吹く北風が、あたしの栗色の髪を揺らす。

この辺りは、大きなビルが数多く並んでいるから、この時間帯は太陽の光が全く当たらない。そして今の季節が冬と言う事もあって、体感気温は一段と寒かった。
一応、制服の下にカーディガンを着ているけど、あんまり役に立ってない。

そう、あたしは学生。『ヒウン・トレーナーズ・ハイスクール』って言うポケモントレーナー育成のための学校に通う１６歳。

ポケモントレーナーと言うのは……皆さんご存知の通り、ポケモンと共に生き、ポケモンと共に成長していく……そんな人達のこと。

あたしはポケモンが好きだから、トレーナーになろうと思ったんだけどね。

「……眠い……」

とぼとぼと通学路を歩きながらも、ついつい口から本音が漏れてしまう。だって……昨日は訳あってあんまり寝てないんだもん。仕

方ない……よね？
訳って言うのは……その……まあ、色々だよ！色々……。

「……アヤ！」

眠気を覚ますために瞼を擦りながら歩いていると、不意に後ろからあたしの名前を呼ぶ声が聞こえた。って……この声の主は……多分あたしが今　最も会いたくない人物。

あたしはある人物の顔を思い浮かべながら、恐る恐る後ろを振り向く。

「うわ……」

あ……あたしの予想は的中してしまった……。思わず変な声を出してしまう。

黒い髪は耳に掛かるくらいの長さで、薄いブルーの瞳。間違いない。

「カズサ……」

あたしは不機嫌そうな口調で、その人物『カズサ』の名前を口にする。
ただでさえ寝不足なのに……。こういう時に限って、カズサとばったり会ってしまう。

「朝っぱらから不機嫌な所を見ると……今日も寝不足なんだろ？」

すると、カズサが小馬鹿にする様な口調でそんな事を言った。余

計なお世話よ！

あたしは、周りの人からよく「寝不足のアヤは機嫌が悪い」と言われる。……まあ、自覚はあるんだけど。直そうと思っても、なかなか出来ないんだよね……。

そんな事もあって、よくあたしをからかってくるカズサとは、こんな日の朝に会いたくないんだよね。

「しょうがないでしょ！昨日は色々と忙しかったんだから……」

そんなカズサの言葉に対し、あたしはそう言い返した。

ちなみに、あたしとカズサは幼馴染で、通っている学校も全く同じ。だから、遠慮無くこんな事が言える。でも、少しきつく言い過ぎたかな……？

そんな風に思っていたのも束の間、カズサは口元を緩め、微笑を浮かべた。

「大方、学校の課題が終わらなかったんだろ？　ギリギリまで溜めておくから、そんな事になるんだ」

そしてカズサは、またもや小馬鹿にする様な口調であたしにそう言った。

「う……うるさいわね！　だって……その……しょうがないでしょ！」

うぅ……あたしはカズサに図星を突かれてしまった。思わずむきになって、カズサを怒鳴ってしまう。

あたしがむきになればなるほど、カズサも面白がってからかってくる。
分かっているけど、言われっぱなしって言うのもちょっとね……。
「何が、しょうがない、だ。大体、いつまでも課題を放ったらかしにした、お前が悪い」
「だ……だから！　理由があるの！」
むむぅ……。流石カズサ……。一歩も譲らない……。でも、あたしも負けないんだから！
「へえ……。じゃあ、一体どんな理由だ？」
「えっ……？　いや……その……も、もういい！」
……でも、やっぱり結局負けたぁ……。どうしてもカズサに勝てない……。
って、あたし何やってんだろ……。何だか無駄な時間を過ごした様な気がする……。
フとあたしは、通学路に立てられている時計を見てみる。
今は八時二十五分か……。ん……？この時間は……。
「ち……遅刻！」
カズサと言い合ってて、すっかり時間を忘れてた！
あたし達の学校の最終的な登校完了時間は八時半だから、このままじゃ遅刻しちゃう！

「もう！　これも全部カズサの所為（せい）だからね！」

「……僕の所為にするなよ……」

あたしは最後にカズサを怒鳴ってから、慌てて走り出した。
学校まではまだ少し距離があるけど、このペースで走れば、恐らくきっと大丈夫……なはず。

〈ヒウン・トレーナーズ・ハイスクール〉

「つ……疲れたぁ……」

あたしは、倒れ込む様にして自分の席に着いた。
あれから死にもの狂いで走って……なんとか遅刻せずに済んだ。
……冬だったから良かったけど、夏だったら絶対に汗だくだったなぁ……。朝からこんな思いするなんて……。

肝心のカズサはと言うと、あたしと同じペースで走ったのにも関わらず、涼しい顔をして席に座っている。
相変わらず、意外と体力あるんだからなぁ……。そこは羨ましい……。

「どうしたんだ、アヤ？　今日はいつも以上にぐったりしてるな……」

心のなかでブツブツ文句を言っていると、あたしの前の席に座っている女の子が声をかけてきた。

「シオン……。だって、カズサが……」

あたしはその女の子、『シオン』にそう言った。

シオンは、あたしの一番の友達なの。ちょっと冷たい印象を持たれがちだけど、本当はとっても優しいんだよ？

それに、ルックスも結構いい。
銀色の髪は綺麗に分けられていて、肌も綺麗。足もスラリと長いし……はぁ、羨ましいなぁ……。

「何だ？　またカズサと何か揉めたのか？　最近は多いな……」

「う～ん……。でも、原因は全部カズサにある！　あたしは悪くないんだから！」

あたしは、シオンにそう返した。
……でも、本当に最近はカズサと言い合っている回数が多い様な……。き、気のせいよね！　あたしは悪くないし……。

「何だ何だ？　アヤとカズサって、本当に仲がいいんだな！」

すると、今度は後ろの席からそんな声が聞こえた。って、一体何言ってんの！？

「ちょ……リュウヤ！　あんた何　言ってんのぉ？　あたしとカズサは、全然　仲なんか良くないんだから！」

あたしは後ろを振り向いて、声の主『リュウヤ』に思わずむきになってそう言った。

リュウヤもあたしのクラスメイトで、暗い金髪の頭をしている。ポケモンバトルは結構な実力だけど、勉強がちょっとね……。まあ、あたしも人の事　言えないんだけど。

「別にむきになる事無いだろ」

「む……むきになんかなってないじゃない！」

「落ち着け、二人とも。そろそろＨＲ（ホームルーム）が始まるぞ」

あたしとリュウヤが言い合っていると、ため息交じりにシオンがあたし達を宥める。

「うっ……」

それを聞いて、あたしは口を閉じた。

……今日は何だか朝から騒ぎっぱなし。お陰で眠気も覚めちゃった……。

と、とりあえず一端　落ち着こうかな……。ふう……。

「それよりアヤ。　慌てて来たのはいいが、ちゃんとポケモンを連れて来たのか？　今日はポケモンが必要な授業があるだろ？」

自分で自分を宥めていると、シオンがそんな事を尋ねてきた。

「え……？あ……勿論！　あたしがミジュマルを忘れる訳無いでしょ？」

上の空で聞いていたから、ちょっと反応が遅れたけど、あたしはシオンの質問に対し、そう答えた。

あたしは鞄の中からモンスターボールを取出し、シオンに見せてみる。

あたしの手持ちはラッコポケモンの『ミジュマル』一匹だけ。けど、この子は、あたしの大切なポケモンなんだ。だって、あたしの初めてのポケモンなんだもん。

そんな事をしていると、教室のドアが開いて、あたし達の担任の先生が入って来た。

そろそろＨＲが始まる……。

これがあたしの日常の始まり。
平凡で、退屈な時もあるけど、ほとんど毎日が楽しかった。

……でも……、

あの日……、こんな日常がガラリと変わってしまうなんて、今は
まだ、思ってもみなかった。

第1話：いつもと変わらない時間（後書き）

読んでくれた皆様、ありがとうございます！

アヤの一人称を「私」にするか、「あたし」にするかで、かなり迷いました……。

結局、「あたし」になりましたが、いかがだったでしょうか？

これから宜しくお願いします！

感想や評価を、楽しみにしています！

それにしても……キャラのルックスの描写が……（汗）

第2話：予兆（前書き）

今回は、思ってたより更新が遅くなってしまいました……。

では、第2話、お楽しみください。

第2話：予兆

「おっはよー！」

ガラッと音を立てて、教室のドアが開いた。
今日のあたしは朝から機嫌が良かった。だって、昨日はぐっすり眠れたし、登校中にカズサと揉めなかったの。と言うか、会わなかったんだけどね。

そう言う訳で、今日は何時もより調子が良いの！
寝不足の時のあたしと、そうでない時のあたしは、機嫌がかなり違う。……自分で言ってるんだから、本当に自覚はある……。けど、直そうとは思ってるんだよ？

ま、まあ　とりあえず、今日は何だか幸先が良いって事！

「よお、アヤ！　今日は朝からテンションが高いな！」

右手を上げて、朝の挨拶をしながら教室に入って来たあたしを見て、リュウヤが声をかけてきた。
何時もと変わらない明るい笑みを浮かべ、相変わらずのテンションであたしに話しかけて来る。

「うん。だって、昨日はちゃんとぐっすり寝たし」

そんなリュウヤに対し、あたしは席に座りながらそう言った。

「本当、アヤの機嫌は寝不足かそうじゃ無いかで大きく変わるな」

「う～ん……。でもまあ、いいじゃん！　気にしな～い」

今度は席に座って腕を組んでいたシオンが、そんな事を言って来たけど、あたしは緩い口調でそれをかわそうと試みる。

シオンならきっとスルーしてくれるよ！……なーんて、思っていたけど、

「気にしなきゃ駄目だろ。周りの奴らにも、迷惑かけてると思うぞ？」

やっぱり、駄目……？　あたしはシオンから手痛い反撃を受けてしまった。

「うっ……はーい……」

あたしって、シオンには弱いんだよね。

なんだか、言葉に説得力がある……て、言うのかな？　シオンの言う事は大抵　合理的だし、場の雰囲気をよく考えた感じ。　だからかな？　なんとなく素直に受け止めた方が良いような気がする。

「うぅ……相変わらずシオンは暗いな！」

けど、ここに場の空気が読めない人が約一名。

相変わらず暗い、て……今のシオンは、暗いとは別の意味だと思うけど……。

「……確かに、私は暗いかもしれないが……、あんたは少し明るすぎだ」

すると、少し呆れた様な口調で、シオンがリュウヤに言った。まあ、そうなるだろうね……。

「なんだよ、別にいいじゃん！　減るもんじゃ無いし」

シオンの言葉に対し、リュウヤはそう答えた。

……確かに明るい過ぎって事は無いと思うけど、シオンはもう少し場の空気を読め、って言いたかったんじゃないかな。多分……。

「……」

ふぅ、とため息をつきながらもシオンは言葉を失う。

リュウヤの単純な解釈に対し、あたしもちょっと呆れてしまうから、シオンはかなりのものじゃないかな？

「あー、でもほら！　リュウヤって、元気だけが取柄なんだから、別にいいんじゃないかな？」

何だか変な雰囲気になってしまった場を和ませるために、あたしは二人に向けてそう言った。

う～ん、我ながら良い配慮！　本当にリュウヤの取柄とか、特徴と言ったら元気な所くらいだし。

他にって言われても……う～ん……左利きの所？

「おいおい、アヤ。　元気だけ、って何だよ。俺はポケモンバトルが得意って特徴もあるぜ！」

するとリュウヤはあたしの言葉の中のそこが気に食わなかったらしく、補足説明を入れる。

……でも、自慢出来る程の事かな？

確かにあたしよりは強いと思うけど、カズサの方が実力は上だし。

あれ？　そう言えば……。

「そう言えば、まだカズサは来てないの？」

あたしはその事に気づき、シオンに尋ねてみた。

もうすぐ朝のＨＲが始まるのに、まだ来てないみたい。

あいつが遅刻する事なんて、滅多に無いのに……。何かあったのかな？

「……さあな。　カズサに関しては、アヤの方が詳しいだろ。　何か言って無かったのか？」

「……いや、これと言って何も……」

どうやら、シオンも知らないみたい。

そりゃそうか。流石のシオンでも、カズサの事まで把握している訳ないし。

あれ……？　でもあたしの方が詳しいって、何で思ったのかな？

……幼馴染だから……？　うん、きっとそう。　絶対そう！　あたしはシオンを信じてるから！　シオンはカズサやリュウヤみたいに、そんな事をネタにあたしをからかったりしないんだから！

あたしは頭の中で勝手に納得し、うんうん、と首を縦に振っていた。

そんな事を話している内に、既に時計は八時半を回っていた。

今日も、あたしのいつもと変わらない日常が始まる。そう、思っ

ていた。

――――午後

ふう、やっと五限目の授業が終わったぁ～。　これで残すは六限目の授業のみ！　もうひと頑張りだね。

あたし達の学校の授業は、一日に大体　六教科ある。　午前　四教科やって、午後　残りの二教科をやる感じで、お昼ご飯の後にやる五限目は、とりわけ眠くなっちゃうんだよね。

五限目の授業は、ちょっとうつらうつらとしちゃったけど、完全に居眠りした訳じゃないから大丈夫だよね？　リュウヤに関しては、鼾をかいて眠ってたし。　先生が何回か注意をしていたけど、起きてはまた眠り、起きてはまた眠り、の繰り返し。　お陰で、全然授業が進まなかった様な……。

「リュウヤ、いい加減　起きたらどうだ？」

ついに見ていられなくなったのか、シオンがリュウヤにそう言った。　て言うか、五限目はほとんど寝てたのに、終わった今でもまだ寝ていられるんなんて……。　流石に、寝不足のあたしでもそこまでは寝ないよ……。

「う～ん……ムニャムニャ……。もう朝かぁ？」

渋々と言った感じで、リュウヤが頭を上げた。

……寝ぼけてるみたいだけど、そんなので六限目、大丈夫かなぁ……？　絶対また寝るよね……。

「ほら、早く目を覚まして！　六限目もあるんだから……、流石にもう寝てられないでしょ？」

あたしも思わずリュウヤを起こそうとしてしまう。だって、これ以上寝たら、体内時計がおかしくなって、昼と夜の区別がつかなくなっちゃうよ。

それはあたしが既に実証済み。って、自慢になる事じゃないか。

「リュウヤ、そんなに寝てばかりで授業は身に入ってるのか？」

するとシオンがリュウヤにそんな質問を投げかけた。

そうだよね～。このままじゃ、またテストで赤点を取っちゃうんじゃないの？

「心配ないって！　俺は常に夢の中で授業を受けてるから！」

ちょ……えぇ、何その答え……？

「……そんな訳ないだろう」

シオンも苦笑してる……。　でもこの答えは笑っちゃうよね。もう１６歳なんだから、もうちょっとましな言い訳を考えようよ……。

「フフッ……」

あたしも口に手を当てて笑ってしまう。

まあ、しょうがないよね？　態々　笑いを我慢する事ないし。

「な、なんだよ。笑うなよ」

最後の抵抗、と言わんばかりにリュウヤがそう言った。

その言葉とおどけた顔を見て、何だか可笑しくなって……。あたしはまた声を出して笑った。それにつられて、シオンまで笑っている。

「お、おい。シオンまで……」

リュウヤは少し焦った様な表情をしたけど、やっぱり耐えられず、つられて笑ってしまった。

シオンが学校で笑う事は結構珍しいから、あたし達は少し驚きの表情を浮かべながらも、笑っていた。

……その時、

ブーブーブー……

あたしのポケットの中に入れておいた携帯が震えた。

「え……？」

ちょっと驚いた様な声を出しながらも、あたしはそれに気づく。ポケットの中の携帯の震えは、しばらく経っても治まらない。つまり、これはメールじゃなくて電話と言う事になる。

誰からだろ？　こんな時間に……。

あたしはポケットの中から折り畳まれてる携帯を取り出し、それを開く。そして、その携帯のディスプレイに映っている発信者名を見てみた。

「なっ……！？」

う……嘘でしょ……！？

その名前を見て、あたしは驚愕していた。だって、そこに映っていたのは……。

「……アヤ、誰からだ？」

驚いた様子のあたしに気づいたシオンが、真剣な口調であたしに話しかけてきた。

ちょっと反応が遅れたけど、あたしはディスプレイに映っている名前を読み上げた。

「……カズサ……から」

「カズサ？」

それは、朝から学校に来ていない、幼馴染の名前だった。
遅刻も欠席も滅多にしないし、成績も悪くない。所謂（いわゆる）優等生が、何の連絡も無しに学校を欠席している。ちょっと不振に思ったけど、風邪とかかなと勝手に解釈していた。
そんな奴から、今頃になって電話がかかってきた。

……こんな時間にあたしにかけてくるなんて……一体どう言うつもりなの……？

「おいアヤ、出てみろよ」

興味を示したリュウヤが、あたしに電話に出るよう促す。
警戒はしていたけど、あたしはリュウヤに言われるまでもなく、電話に出るつもりだった。て言うか、カズサはあたしの幼馴染だし、そこまで警戒しなくていいか。

「うん……」とリュウヤに頷いた後、あたしは通話ボタンを押して、携帯を耳に当てる。

「……もしもし？」

とりあえず何時もよりは真剣な口調で、あたしは電話越しの発信者に向かって、そう言った。

『アヤ……か……？』

すると、発信者も声をかけてきた。

……やっぱり、この声はカズサ。

ふう、と息を吐いた後、あたしはまたカズサに声をかけた。

「一体、何のつもり？　学校にも来てないし……。何かあったの……？」

あたしは何時もカズサに話す時の感じで、そう尋ねた。

でも、これでも結構心配しるんだよ？　学校に来てないカズサが、こんな時間に電話をかけてくるなんて……。明らかに普通じゃない。

あたしが質問した後、しばらく何も言わなかったけど、カズサはようやく口を開いてくれた。

『アヤ、今は黙って僕の言う事を聞いてくれないか？』

「へ……？」

か、カズサは何を言ってるの？　それに、あたしの質問は無視？　またあたしをからかうつもりなのかなぁ……と、思いつつも、あたしはカズサの話の続きを聞く。

『いいか？　今すぐ学校の裏門まで一人で来てくれ。今すぐだ』

「ちょ……あんた何言ってんの？」

ほ……本当に何いってるの？　いきなり裏門に来いって言われても、何の理由も言わないんじゃ、不信感を抱かれてもしょうがない。

『……今は詳しい事は言えない。　時間が無いんだ。　だから急いでくれ。　いいな？』

「ちょ……ちょっと待って、カズサ！」

ブツンッ

そこで、カズサは電話を切ってしまった。

……結局あたしの質問は全部　無視？

でも、今のカズサはかなり真剣な口調だったなぁ……。

あんなに真剣な口調のカズサの声なんて、滅多に聞かない。あたしと話すときは、大抵からかうような口調で話すのに……。今は違った。

「カズサ、何だって？」

通話の内容がよっぽど知りたかったらしく、真っ先にリュウヤがあたしに声をかけてきた。

「よく分からないけど……、黙って一人で裏門まで来いって……」

「裏門？」

あたしが言い終わった後、口を開いたのはシオンだった。怪訝そうな口調で、あたしの言った事を繰り返す。

「お？　こりゃもしかして、愛の告白ってやつか？」

「バ、バカ！　そんな訳ないでしょ！」

リュウヤが余計な事を言ったので、あたしもそう言い返した。

……ほ、本当に絶対違うよ？　なんだか、焦ってる感じだったし。

強いて言えば、そこは危ないから早く逃げろって感じ。

「それで、行くのか？　裏門に……」

腕を組んで考え込んでいたシオンが、あたしにそう尋ねてきた。

「うん。なんだか焦ってるみたいだっだし……。今回は、あたしをからかっている訳でもなさそうだしね」

「そうか……」

シオンは、警戒はしているけどあたしが言うなら止めはしない、って感じだった。

そんなシオンに悪いな、と思いつつも、あたしは立ち上がって教室の出入り口まで行く。

「それじゃ、ちょっと行ってくるね。先生には、適当に伝えといて」

「おう！　任せておけ！」

最後に二人にそう伝えてから、あたしは教室を後にした。

裏門かぁ……。ここから結構遠いな……。

この後あたしは、そんな呑気な考えも吹き飛んでしまう程の事実を知る事になってしまう……。

第2話：予兆（後書き）

なるべく最初の方は明るい話を多くしたいと思ってるのですが、作者はシリアスな話の方が書きやすいので……。ちょくちょくそんな話を入れていくかもです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6699z/

ポケットモンスター　トワイライト

2011年12月26日22時51分発行